
缶じゅ～す

井沢あや

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

出じゅ～す

【Zコード】

Z3348A

【作者名】

井沢あや

【あらすじ】

一人の男の日常の一コマ。短いのでサラッと読めると思います

ああ、何だらうこの街は。

どうしてみんなそれほど喜嬉として歩いているのか。こつちは不幸の最果にいるというのに。実に不愉快だ。

俺は道路と歩道を遮るガードレールに腰掛けながら、そんな事を思っていた。クリスマス、正月と、こう俗にめでたいと言われる行事が続くと、俺は心底気がめいる。

ふと、路の隅にポツリと佇む自動販売機が目に入った。道行く人で、立ち止まる者など一人もいない。

「お前も一人なのか……」

自販機と自分の姿を重ね、俺は思わず苦笑した。街中で寂しく佇むその姿は、あまりに俺と似ているじゃないか。何故だか親近感を抱き、俺は心などある筈もない古びた箱に近付いた。

まだ寒いのに、ホット缶など売っていない。“つめたつい”の表示が、なんだか淋しく見えるのは気のせいかな。

いつの間にか俺は財布を取り出し、百円を一枚そいつに入れていった。俺がジユースを買ったからといって、自販機の奴が喜ぶ訳もなく。はつきり言って、只の自己満足。

「コーヒーのボタンを押すと、缶が落ちる音と小銭の金属音が鳴る。どちらも日常に溶けこむ、ほんの些細な音……。

「さむ……」

俺は冷えたコーヒーを片手に呑く。冷たさに取り落としそうになつたので、袖を伸ばして手袋代わりにした。少し、後悔。

不運というのは続くと言うが、俺は昨晩爪を切つたばかりでつまり、プルリングがなかなか開いてくれない。

バチンッ！バチッ！それが俺の苛立ちを増幅させる。ついてない。

いや、開くさ。缶ジュークくらい開けようと思えば簡単にね。だけどここで諦めて何か道具を使うのは、プルリングごときに屈したもので腹が立つ。先に仲間意識の芽生えたアイツにも、何だか軽い敵意を感じる。

「くそつ……」

俺はひたすらに、自分の手で、プルリングをこじ開けようと頑張った。やつと小気味いい音と共に缶ジュークが口を開けた時には、自然とガツツポーズをキメてしまつた。我に還り辺りを見回す。誰も見ていなかつたことに、俺は安堵した。

一口すすると、豊醇な薰りが口内に広がつた。俺はフウ、とため息をつく。息は白い。

やつぱり自販機はいい奴だつたんぢやないか。なんて。我ながら滑稽な考えだが、自分のそんな所は割と好きだ。

「頑張れよ」

自販機に声を掛けた。奴はウイーーンと答えた。

『お前もな』

そう、言われた気がした。

缶ジュークを飲み干すと、俺はごみ箱にそれを捨てようとした。俺を苦しめた憎きブルリングがいじらしく光る。今日という日の想い出に、とつておくのも悪くない。

銀のワッカを切り離すと、ジャケットの内ポケットにしまつた。

「じゃあな。同志よ」

俺は奴に向かつて微笑んだ。さつきまでの苛立ちもせっぱり感じない。

俺の放つた缶ジュークは、弧を描いてごみ箱に消えた。

日が傾き、先程まで薄暗かつたアイツの処に光が射し込む。横顔は、少し逞しく見えた。

翌日、

奴は変わらず其処に在る。

変わったのは、奴にお客さんが居ることと、俺の心が晴々として

いることだけだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3348a/>

缶じゅ～す

2010年10月26日04時43分発行